

学校だよりには皆様にお知らせしたい学校の教育方針や基本的な考え方を載せることが望ましいのですが、今回は新聞にあった2つの記事を参考に皆さんと共に考えてみたいと思います。

「好きも苦手も1位算数(数学)」

ある玩具メーカーの調査によると、小学生の好きな教科のトップは「算数」(30.7%)、苦手な教科は「特にない」(34.7%)を除くと「算数」(23.7%)。中学校でもどちらも数学という結果だったそうです。

好きだったはずの算数(数学)がいつの間にか苦手になってしまったりその逆だったり。または、ずっと好き、または苦手という場合もあるのでしょうか。どんなことがきっかけでそうなるのか。「好き・苦手」の背景には、分かる・分らない、できる・できないなどがあると思われまます。また、担当する先生への好き・嫌いの感情が影響する場合もあるかもしれません。しかし、一番の原因は、考え・悩んで解決できることの楽しさを知る機会を持っていないことではないかと私は思います。子どもたちの中には、できることはするけど、できないことや難しいことはしたくない。難しいと感じることをなんとか解決しようとしないうという傾向があるように感じます。できることしかない・したくないという毎日であれば、時間は有り余るほどあり、そのほとんどをゲームなどに費やすこともできます。その結果はどうなるかは容易に分かりません。

前期の終業式(今回は20周年記念式典児童の部に含まれました)に、子どもたちに「春の足音」という絵本を紹介しました。

・・・・・
きょうは、立春。
こよみのうえでは、春になると いわれて
います。
でも、それは まだ 雪が のこつていま
す。

「家の周りを さがしてごらんさい。春の足音が きこえるかもしれませんよ」
先生が いいました。
ミカは、なかよしの よしみちゃん、春の足音を さがすことにしました。

二人の「春の足音」探しが始まりました。いろいろな音が聞こえてきます。その音を聞き「これが春の足音なのかな?」と思いつながらの時間を過ごすことができました。(どんな音が聞えたのでしょうか)

私が子どもたちに伝えたかったのは、「知りたい」「分きたい」という気持ちをもち続けることができる人になってほしいということでした。宿題のような与えられたものしかやろうとしない毎日であつてほしくないことを伝えたかったです。分かる喜び、知る喜び、体験する喜び。こういう喜びがない日々はつまらないですね。保護者の皆さんから見た子どもたちの毎日の生活はいかがですか。

「ゆとり世代に評価の声」・・・「肯定感強い」「たくましい」

2002年の改訂学習指導要領の完全実施の目玉として「総合的な学習の時間」の新設と学習内容の削減、完全週休2日制の導入がありました。そのもとで学校生活を送った子どもたちを「ゆとり世代」と言う人もいます。当時は開校して数年が経過したころでしたが、桐光学園小学校では、

総合的な学習の時間を「総合」として実施し、その内容は農園活動とコンピュータを利用した学習に限定しました。また、完全週休2日制の実施には踏み込まず、逆に土曜日を有効に使いたい考え、土曜日の講習、制作活動を開始し、その後ふれ合い活動などの実施につながっていききました。学習内容の削減についてはその必要性がないという判断で行いませんでした。

最近、子どもたちの中で起きる様々な事件事故の背景に、不登校、ひきこもり、暴力行為、虐待、貧困などがあると聞かれています。ひきこもりに関しては、その期間の長期化(高齢化)も大きな問題になっています。同時に問題になっているのが、「自己肯定感の低下」です。「どうせ自分ほだめだから」と考えてしまう子どもたち。100点でないといつてももらえない子にとつて、99点は0点と同じ。親が先回りして失敗を未然に防止しようとしていのにその期待に応えられないときに感じる無力感。この根っこにあるのが、「他の子と比べる親」「子どものことをなんでも知らない」と気が済まない親「過干渉な親」の存在です。子どもがかわいいから、子どもを愛しているからこそその親の行動です。願わくば、子どもたちに伝えるメッセージの一つに「失敗してもいいよ」「安心して失敗できる環境を提供する」を加えていただければと願います。

ゆとり世代は自己肯定感が強いと新聞記事にありました。本当にそうなのかは私には分かりませんが、そういう力を持てるようにしていくことはとても大切なことだと考えます。子どもたちの生き生きとした姿を見てみたいです。
(斎藤 滋)

4年生「農園活動」



4年生の総合では、これまでの作物栽培の経験を生かし、グループ別の栽培学習を行いました。これは、子どもたちが自ら進んで世話をする気持ちと共に行い、試行錯誤を重ねながら栽培学習を深めていくことがねらいです。子どもたちは、栽培計画を立てるところから活動を始めるとは初めてということに張り切り、取り組み姿勢も多く、「水やりの分担を決めようよ」「支柱の準備もしたいね」など、一生懸命に協力しながら活動を進めていく様子を見ることができました。中には、害虫や動物の被害を受けて苦労したグループもありましたが、一人ひとりが作物に愛着を持ち、最後まで責任を持って世話をしようと頑張ることができたことは素晴らしいです。この栽培学習を通して、作物を育てた苦労や喜びを感じ取りながら、また一つ大きな成長へと繋がったことと思います。

(鈴木健太郎)

5年生「家庭科」



5年生から始まった家庭科の授業では、主に調理実習と裁縫を行って来ました。どちらの活動も初めて体験する子が多く、一つひとつの活動に興味を持って取り組む姿が見られました。

六月ごろから始めた裁縫は、約三か月間でいろいろな縫い方ができるようになりました。見違えるほど成長した子どもたちですが、最初は針に糸を通すことにも苦戦をしていました。やっと糸を通すことができたかと思えば、今度は玉結び・玉どめという壁にぶつかり、「先生！全然できません」と嘆くこともありました。そんな子どもたちも、現在は作品展に展示する予定のマスク作りにも挑戦しています。作品展で5年生のマスクトをご覧になる際には、細かい部分まで見ていただけるとありがたいです。きっと、子どもたちの成長を感じられることと思います。

(佐藤浩太郎)

6年生「英語の授業」



英語の授業では英文の読み書き、文法などの学習を通して英語の基礎を楽しく学ぶことに力を入れてきました。今年度は、ネイティブスピーカーの先生の授業を秋に行うことになり、英会話も積極的に取り入れています。

会話の授業を始めた頃、「(何て言っているのか)何となく聞き取れるが、とっさの一言が出てこない」「自分のことを伝えたいのだけれど、何から話してよいかわからない」という体験をしたことがあるということも多くの子が話していました。

そこで、会話によく登場する動詞を使って会話力を上げるための指導を行いました。例えば「I have」は「持つ」という意味が一般的です。その他にも「I have lunch」で「私は昼食を摂ります」という意味になり、「I have headache」では「私は頭が痛い」という意味にも使われます。このように、知っている単語を駆使すればある程度の会話ができることを子どもたちは学習しました。回を重ねるごとに少しずつ自信をもって、自分のことを英語で話そうとする子が増えてきました。

ネイティブの先生方とどのような時間を過ごすことができるのか、今からとても楽しみにしています。

(青木麻理)

日々の学校生活の中で、子どもたちは様々な活動を行っています。今回、ご紹介したものはほんの一部です。ぜひ、その他の学校の取り組みについてもお子さんから話を聞く機会を作っていただければ幸いです。今後ともご理解とご協力の程、よろしくお願い致します。

☆各学年の取り組みの様子☆

これまでの学校生活の中で見られた成長の様子を、各学年の取り組みとともにご紹介します。

1年生 「朝顔を育てよう」

総合の授業で四月から一人一鉢、責任を持って朝顔を育ててきました。毎日のお世話に加え、観察カードに特徴や変化をまとめました。この活動を通して、朝顔の生長の過程を知るとともに、日々の水やりから間引き、追肥など植物を育てるための知識、そして責任を持って育てることの大切さを学びました。芽が出た」虫がついてた、どうしよう」つるが隣の友だちとからまつちやつた」つぼみができたよ」など、毎日少しずつ生長している様子に一喜一憂しながら、こまめに水やりをしたり、問題に対応したりする子どもたちの姿が見られました。朝顔を一つのきっかけに、これからも命あるものを大切に育て、様子を気にかれたり、生長を喜んだりしながら、身の回りの小さな変化に気づけるような豊かな心を育てていってほしいと思っています。(小山内杏実)



2年生 「農園活動」

総合では、農園の畑を利用してミニトマトの生育を行いました。4月から行ったこの活動では、畑の土起こしから始まり、畝づくり、苗植え、支柱立て、休み時間の水やり、収穫片付けを行いました。子どもたちは熱心に世話をしていたので、7月に入ってミニトマトが赤く色づいたときには、笑顔であふれていました。夏休み前に無事に収穫することができ、みんなでおいしくいただきました。自然を相手にすると、思ったようにならないこともあります。あきらめずに熱心に世話をし、乗り越えた子どもたちは、力強かったです。そして、夏休みが明けて取り組んだ畑の片付けでは、天気にも恵まれて強い日差しの中での作業となりました。立派にやり遂げることができました。農園活動を通して、クラスとしての団結力が一段と増したように感じました。(横山治樹)



3年生 「サマーキャンプの振り返り」

3年生は、7月に行ったサマーキャンプのふりかえりを行いました。今年度のキャンプについて、まずは、個人的な内容と集団としての内容の2面から反省を考えます。子どもたちの頭に浮かぶのは、よくできた！と思うことより、もっとがんばれた！と思うことのほうが多かったようです。

次に、その反省から来年度に向けて努力すべきことがらを考えます。あわせて、今年度の4年生たちのよさから自分たちのあるべき姿もイメージしました。来年度は年上の学年として参加することになります。子どもたちもそれを自覚しているようで、楽しそうに話し合う際の表情にも、真剣さがうかがえました。結論として挙げたことは、ほぼ基本的なことばかりでしたが、そうした当たり前のことを日々しっかりと継続して行うことの大切さに気づく機会になったかもしれません。(浅利直樹)



活動◇紹介

日頃の様々な活動において、実際の実践を厳選し、そこでの様子や指導のねらいなどをご紹介します。

集団行動

昨年度まで、4～6年生は組体操に取り組んでいましたが、全国的に事故の報告が相次ぎ、確実に安全を保障することのできない組体操を、本校でも廃止するという結論に至りました。そこで、代わりになるものを検討した結果、集団行動を実施することになりました。初めての取り組みということで、練習する子どもたちの様子を見ると、動作の始まりと終わりのタイミングや、交差しながら行進するところなど、息を合わせることが難しいと感じていました。また、華やかな演出が少なく淡々とした動作が多いため、子どもたちは、一生懸命取り組んでいる気持ちが、見ている人たちに伝わるかどうか不安部分があったと思います。しかし、先日の運動会で、保護者の皆様から心温まる拍手や声援をいただき、演技を終えた子どもたちは、自分たちの取り組みを認められたことが何よりも嬉しく、安堵と達成感に満ちた表情をしていました。集団行動を通して学んだ忍耐力や集中力、人を思いやる心や連帯感などが、今後の学校生活に生かされていくことを期待しています。

(本田昭太)



正面玄関 リニューアル

本校が開校した1996年から21年、ずっと同じ佇まいで子どもたちの成長を見守ってきた正面玄関が、20周年を迎えるにあたって改装されました。手動で開閉していた扉は自動ドアに変わり、校舎内に入ってすぐの壁面にはタイルが貼られ、ベンチも2つ設置されました。また、正面玄関と昇降口の間天井には間接照明が、少し奥に移動したショーケースの上部の天井にはダウンライトがつけました。

正面玄関を改装するにあたって、最も難しかったのは自動ドアの設置でした。来校された方にご自身で開閉していただいていた重たい扉を、自動ドアによって開閉することを考えたのですが、それを設置するには横幅が足りませんでした。その問題点を解消するために、機能と安全性を考慮の上、扉の両側にステンレスの柱を立てるデザインとすることで、設置を可能にしました。

セキュリティ上、自動ドアの開閉は事務室から行うことにしておりますので、来校された際にはインターホンでお知らせください。年度末には下駄箱の改装を予定していて、現在、子どもたちがより使いやすい形状、デザインのものを設置できるように検討しております。新しい下駄箱についても、どのようなものが設置されるのかを楽しみにしておいていただければと思います。

(馬場 淳)



1996年開校当時の正面玄関



2016年改装された正面玄関